緑爽会会報　No. 187

2023年8月25日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　荒井正人

デザイン・制作　関塚貞亨

～～《報告》～～～

平野紀子さん、竹中彰さん、髙橋清輝さんは偶々3 人とも北海道に行っていて参加できないということだった。体調の関係で出席を見送った会員もおられたが、関塚さんは暑さで行けないがと、電話でお元気な声を聴かせていただいた。北海道の樋口さんが「銀河通信」の発行 35 周年を迎えて記念の集まりが開かれ、乾杯の発声は芳賀孝郎さんがされたことをもお知らせした。

和気あいあいの中、記念写真を撮ってお開きとなった。

なお、山川陽一さんからは「さがみこべリーガーデン」がグランドオープンになったと、お土産のブルーベリーをお持ちいただいた。今年は実のつき方が早いとのことで、7 月 20 日にさがみこべリーガーデン訪問を企画した。ただ暑気払いと日にちが近いので、この指とまれ的に有志で訪ねた。（この時のことは追って報告）　　（報告：荒井正人　写真：石塚嘉一）

～～《寄稿/投稿》～～～

に率先して当たり、助っ人以上の活躍ぶりであった。そこでついたあだ名が「ファイト」である。

私が自然保護担当理事となって最初の全国集会が「大台ケ原の自然を守る」をテーマに、山の猛者ぞろいの東海支部との共催になった。不慣れな議長役として未熟な私の隣に付き添って、東海支部の猛者たちに気後れしないように勇気づけてくれたのもまさに侠気。80 周年記念の絵画展覧会でスケッチクラブ代表の深川安明さんの隣に松丸さんが座ったのも謎ではなく、心細がる深川さんを勇気づけるために寄り添った松丸さんの侠気の表れであったと思う。

筋肉隆々でなくても、痩身で一見スマートな松丸さんは実際には、強靭な肉体と侠気の持主で「まさに偉丈夫であった」と思う。スキーの権威でＮＨＫの教育番組でスキーのカーブとエッジの大切さを解説したこともあった。そのことはまた別の機会で触れることにしたい。

終戦の日を迎えて

松本 恒廣

〝8 月や 6 日 9 日 15 日″　半藤一利『忘れ残りの記』より。

6 日はヒロシマ、9 日はナガサキ、15 日は終戦の日。小生、3 年生になった春休みの 3 月 10 日。ラジオからは「警戒警報発令、東部軍管区情報　敵一機南方洋上より本土に進入しつつあり、警戒を要す」偵察機進入のニュース。この後、米空軍重爆撃機「超空の要塞」B-29、325 機の大編隊による東京大空襲が始まった。あとから知ったことだが、高度は 1500ｍから 2300ｍ。なんと雲取山より低い高度だ。

世田谷の我が家の防空壕から見た東の空は一面に黒煙におおわれていた。江東地区は全滅した。23 万戸消失、死傷者 12 万。4 月、学校は閉鎖。集団疎開組の行き先は、先ずは伊豆修善寺だった。毎日温泉に入れて暖かい布団にくるまって。そこは今でも残る一級旅館だったが、この伊豆半島は米軍上陸の危険性ありとのことで急遽転進することになり、落ち着いた先が青森県西津軽郡木造町(当時)、ポプラ並木の彼方に岩木山が聳えていた。各学年毎に 3 軒のお寺に分宿した。そこではノミとシラミとダニの大歓迎を受けた。食べるものも満足にあるわけもなく、イナゴ、タニシ、たまにナマズが釣れようもんなら大騒ぎとなる。道端に生えている雑草から食べられるものを教わった。やがて 8 月 15 日、正午、重大放送があるからと皆、寺の庭に整列させられた。放送が始まったが雑音がひどくて何を言ってるのか分からなかった。その内に先生方は皆、部屋に閉じこもってしまった。何か変だ、やがて戦争が終わったことを知る。

10 月末、帰れることになり僅かな間だったが一緒に勉強した地元小学生の皆に見送られて帰京の途についた。途中、仙台駅では閉められたブラインドの隙間から覗き見た、自動小銃の引き金に指をかけて辺りを睥睨している黒人兵の姿に息をのんだ。焼けただれた東京駅から恵比寿駅へ。ここから母校まで歩いた。辺り一面焼け野原だった。

幸いにも母校は海軍に接収されていたお蔭で焼夷弾が落ちても消火してくれる人手が多くて助かったとか。学校が近づくと 2 階の窓から白鉢巻き姿にセーラー服もんぺ姿の女学生達。勤労奉仕で残っていたであろう彼女達の「お帰りなさい！」という声が、今だに、耳に残っている。

久しぶりに帰り着いた我が家は 3 軒先まで焼けていた。もう少し終戦が先だったら完全に焼け出されていたろう。薄暗い電灯の下で、オフクロが苦労して手に入れてくれたであろうサツマイモが 5 本だけ皿にのっていた。一家 5 人ちゃぶ台を囲んで食べられるものはそれだけ。夜は火の気もなく、せんべい布団に弟と抱き合って寝た。とにもかくにも一家 5 人無事だった。あれから 78 年が経った。

山岳会設立の頃〈20 世紀初頭の東京〉❺

新宿にあった源兵衛村と武田久吉

南川 金一

庄田元男氏には、ウェストンをはじめ幕末～明治期の日本の山で活躍した西欧人についての優れた研究がある。『日本アルプスの発見―両洋文化の交流―』（2001 年、茗溪堂）の「アーネスト・サトウと武田久吉」の章で、武田久吉の「其の当時は東京の郊外であった源兵衛村に土地と家屋を借りて別墅とし、（父親と）週末を其処に過ごし、竹類の観察に興じた」との記述（庄田氏によると、出典は昭和 42 年 5 月号『歴史読本』に寄せた「エルネスト・サトウの片影」）、また、サトウの日記に「久吉と源兵衛村へ出かけた」とする記述があることを紹介している。そして、「穴八幡のある戸塚村（現在の西早稲田）の西が源兵衛村である」ことを明らかにし、久吉が 13 歳頃、サトウが駐日公使であった明治 28 年頃の日記としている。

源兵衛村がサトウと武田久吉父子の思い出の場所であったことについて、武田久吉の『明治の山旅』に記述はない。サトウと武田久吉を調べる最良の資料は、萩原延壽の『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄―』である。1976（昭和 51）年 10 月 12 日から朝日新聞夕刊に連載され、後に同じ書名で朝日新聞社から刊行された。庄田氏は「（『遠い崖……』には）久吉がサトウの次男であるという事実をはじめとして、サトウ一家の情愛こまやかな関係が美しく綴られている。これらの関係が明らかにされたのは、武田久吉の未亡人武田直子の好意によるものだと萩原氏は指摘している。…直子未亡人はおそらく故久吉の意のあるところを忖度したうえで、萩原氏に家族関係の情報を提供されたものと考えられる…」と書いている。もう少し分かりやすく言えば、武田久吉は父親との関係を公にすることを生涯避けたが、晩年になってそれを明らかにする心境になったので、久吉の死後、直子夫人はその意を忖度して萩原延壽に家族のことを語ったのだ、という意味である。

会報 No.375（1976 年 9 月）に、西春彦・元駐英大使の注目すべき話が載っている。日英協会主催の生麦事件百年記念講演会で「朝日講堂での記念講演会では私の求めに応じ『父アーネスト・サトウを語る』という題目で講演されました。博士が父君との関係を明らかにされたのはこれがはじめてであり、このとき博士は 82 歳の高齢でした」（1976 年 7 月 22 日開催、日高信六郎氏追悼会に寄せられた書信）。高齢になってからの武田久吉の心境の変化を裏付ける証言である。

ところで、東京外国語学校（現在の東京外国語大学）の卒業生名簿には、明治 37 年の独語学科第 5 回卒業生 11 名の他に選科修了生 2 名がいて、後者に武田久吉の名前がある。なぜ選科だったのか、私には分からなかったが、その答えは『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄―』にあった。「イギリス留学のことも、明治 34 年、久吉が府立一中を卒業し、東京外語へすすんだころから、ちかい将来の可能性として、サトウと久吉のあいだですでに話題に上がっていたこと」で、すぐに留学が実現しなかったのは、母親を一人にすることへのためらいがあったから、と萩原延壽は解明している。留学へのスタンバイとしての東京外国語学校であり、選科選択だったのである。

私は新宿区に住んでいるが、新宿に源兵衛村があったとは知らなかった。図書館に『地図で見る新宿の移り変わり』という地図集があった。江戸時代の絵図では、堀部安兵衛で有名になった高田馬場のすぐ西側が源兵衛村である。明治 12 年の東京実測図には源兵衛村がある。明治 22 年の地図では戸塚村大字源兵衛に。大正 3 年は戸塚町字源兵衛に。昭和 7 年その一帯が淀橋区に編入されて戸塚 2 丁目となったのに伴い源兵衛の地名はなくなった。『新宿区史』資料編には、「大阪城落城後、豊臣の遺臣小泉源兵衛がこの地に隠れ住み、開墾した地であることから名付いた。元禄以降戸塚村から分離して一村をなした」とある。

『火鉢列車で安達太良山へ』後日談

夏原 寿一

会報 No.171 に掲載の拙文『火鉢列車で安達太良山へ』に載っている写真がほしいとのメールが、山形市にお住いの日本山岳会会員ではない方から本部・事務局に入り、私あてに転送されてきた。そのメールの要所を原文のまま紹介しよう。

> 私は沼尻軽便鉄道の車両及びレイアウトを製作して楽しんでいる者です。
> https://numajirikeibentetudou.blog.jp/
> 沼尻軽便鉄道は 1969 年に廃線となりこの頃まだ中学生だった私は余り写真とかも撮っておりませんでした。
>
> 貴会報（緑爽会会報 No.171）の記事、夏原寿一様の書かれている『火鉢列車で安達太良山へ』を拝見し、沼尻軽便鉄道の施設や車両の貴重な画像が掲載されていて驚きました。
> 大変ぶしつけではございますがこの貴重な画像を頂けないかと思い連絡いたしました。
>
> 如何でしょうか？沼尻軽便鉄道があった地元では毎年「懐かしの軽便鉄道を訪ねて」という歩く会を毎年開催されていてその事務局の方にもお渡ししたいです。

上記の「沼尻軽便鉄道」とは、1969 年まで安達太良山西麓の沼尻にあった日本硫黄という会社が、安達太良山の沼ノ平付近で採掘した硫黄を索道で沼尻に運んだあと、沼尻から国鉄・磐越西線の川桁駅に運ぶために運用していた軽便鉄道のこと。硫黄を運搬する貨物列車には客車も連結されていて、冬場には暖をとるために鉄板で作った火鉢を客車内に置いていたので「火鉢列車」と呼ばれていた。

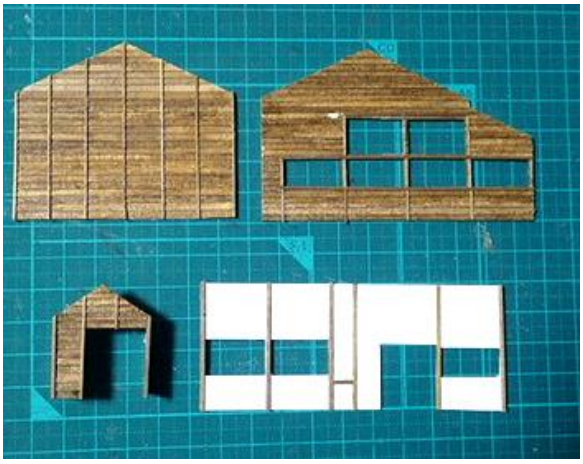
依頼のあった写真は上掲の 3 点で 1958 年 12 月に撮ったもの。画像データを送ると下記のメールを下さった。喜んで頂けて嬉しく思う。

> とても貴重な画像をありがとうございました。とても興奮しております！
> また仲間内で公開の許可を頂きありがとうございました。皆とても喜ぶと思います。
> ところでガソ 101 以外の車両は車体の隅の三角の部分の特徴からボハフ 1 でしょうか？(お二人で写っている画像と車内の風景も含めて)

最初に頂いたメールに「…沼尻軽便鉄道の車両及びレイアウトを製作して楽しんでいる…」とあるので、そこに書かれているブログを開いてみた。直近のブログに沼尻軽便鉄道・鉄道部の社屋の

製作過程の写真が沢山載っているので、その中から 2 点を掲載した。

左側の写真は部材の一部で、詳細な設計図を描いておいて、それを基に切り出した板に細かい部品を取り付けているものと思われる。右側の写真は完成した社屋で、風雨にさらされてきた木造の建物の雰囲気に味わいがある。現在は社屋の表札を製作中とのことだが、表札の書体にも社屋と共に歴史があるようで、そのようなことも調べながら正確なものを作ろうとしている様子が伺える。



思い返せば、私が沼尻軽便鉄道の写真を撮ったのは学生時代のことだ。その写真を会報に投稿したら、その記事を見た方がメールを下さったのだ。思いがけないことだった。

頂いたメールを読んで思い出したことがある。それは、アルパインフォトクラブの代表で緑爽会の会員でもあった故・羽田栄治さんが、折に触れて写真の記録性を説き、撮影した作品の発表を勧めておられたことだ。数々の山岳遭難の現場での取材や、1972 年の札幌冬季オリンピック公式記録映画の制作に参画されるなど、報道写真の世界に大きな足跡を残された羽田さんならではのご高説だ。今回の事はまさに、羽田さんの言われる「記録性」と「発表」そのものだったと思っている。

～～《ようこそ、ルームへ》～～～

次の週には、東京では外来種のアカボシゴマダラに押されて見かけるのが珍しくなった、羽化したばかりのゴマダラチョウが食樹エノキの傍で翅を広げているのを撮ることができた。

チョウは、飛んでいるときに、遠くからでは見分けるのが難しいこともあるが、飛び方や、ちょっとした大きさの違いで、何とか判断する。それでも識別が難しい場合、写真に撮れれば、あとから調べるが、なかなか写真に撮れないチョウが撮れた場合や、普通種のチョウだと思っていたのがあとからよく見ると珍しい種だったということもあって、調査という作業のご褒美かと嬉しくなる。

6 月には、自然観察園でゼフィルスという美しいシジミチョウ類のアカシジミとミドリシジミを今年も見つけた。食樹のクヌギやハンノキがあって、毎年、大きな望遠レンズをつけたカメラを担いでこれらのチョウを写真に撮ろうとやってくる愛好家たちがいるのだが、今年は減ったね、とみんなが言っていた。昨年はウラナミアカシジミも見られたのだが、今年は見つけられなかった。彼らにとってますます住みづらくなっているのだ。

ヒメアカタテハ

日本チョウ類保全協会によると、日本に生息している約 240 種のチョウのうちの約 1/4 のチョウたちが絶滅の道を歩んでいるのである。稀少なチョウばかりでなく、普通種のチョウが急速に減少しているという環境省の報告がある。一方で、東京では、かつて珍しかったジャコウアゲハやナガサキアゲハなどの南方系のチョウが、温暖化の影響と思われるが、ふつうに見られるようになっているし、スミレ類を食草とするツマグロヒョウモンというのはパンジーがどこにでも植えられるようになって、庭先に多数飛んでくる。

このモニタリング調査の結果が意味のあるデータになるためには、調査地点をさらに拡大して何年も調査を継続しなければならない。まだ始まったばかりだが、好きなチョウを見ることができて、それが何かの役に立つ（かもしれない）というのはありがたいことだと思って、この夏も続けている。こんどの山歩きでは、チョウにもちょっと目を向けてみてください。

図書交換会の裏側

荒井 正人

5 月 20 日、ルームで図書交換会が開催された。緑爽会には図書委員が多く、私も「山」に報告を書かせていただいたが、実は開催に至るまでの見えない裏方作業が大変なのである。12 月の年次晩餐会でも行なうことになっていて、会報「山」8 月号に開催告知と、書籍の拠出依頼が掲載されるはずである。そこで、これから図書委員が行う作業を紹介したいと思う。ぜひ皆さんにも拠出をお願いしたいし、交換会にお越しいただきたいと思う。（交換会だけでも入場できます）

① 届いた書籍のリスト作り（会員から書籍が届いたら順次ルームの PC で入力するが、現物を見て、署名本かどうか、函や帯はあるか等チェックしながらなので時間を要するし、何度もルームに行くことになる。時間のある会員が協力して行う。入力は中村好至惠さんが速い）
② リストに基づく値段付け（通常は何段階か値段をつけ、貴重本は入札とする）
③ 一定金額以上の本については事前申し込みが可能となるよう「山」に一覧を掲載
④ インターネットやファックスなどでの事前申し込みを集約し、全書籍について希望者を印字した当日用の申込票を作成（当日来場者は、それに名前を書き込む）
⑤ 会場へ書籍を発送（ここまでを年次晩餐会の 2 日前までに終わらせなければならない）

⑥ 当日午前から会場設営し、書籍と申込票をセットして並べる
⑦ 開場し、一定時間後に抽選会を実施（当選者は支払って本を受け取る＝会計業務あり）
⑧ 抽選後、当選するも不在、あるいは持ち帰れない会員の書籍をルームへ返送
⑨ 後日、書籍発送に向けた文書・請求書を作成し、同封して発送（これが大変）
⑩ 入金の確認、照合など全てが終わるのは１月末である

～～《予告など》～～～